

噛み合わぬ愛——張資平が描いた日中戀愛を中心に

一九〇

喬 亞 寧

はじめに

大正時代、日本を目指してきた中國人留學生の多くが、當時の最新思想であつた「戀愛」を受け入れて日本人女性を相手にその實踐を試みた。彼らは「戀愛」という新しい概念^①の他、戀愛至上や靈肉合一などの關連した言説も中國に紹介している。しかし、こうした概念はほぼ形而上的な空論にとどまるものだった。前近代思想の殘滓や外部からの抑壓もあり、留學生と日本人女性の戀愛實踐は成就するよりも破綻に終わることの方がはるかに多かつたのである。挫折に終わった最初の戀愛の實踐についての彼らの物語は、中國人が戀愛と出會つた際に突き當つた問題の所在を教えてくれる貴重なテキストであると思われる。また、彼らの殘した課題によつて、五四時期に説かれた戀愛の理想を相對化することも可能となるだろう。このような發想に基づき、本論は大正期の日本における男子留學生と日本人女性との戀愛表象について、創造社初期メンバーである張資平の留學期の小説を中心に取り上げたい。

張資平（一八九三—一九五九）は清朝末期、廣東省の客家人家庭に生

まれ、一九一二年に官費留學生として日本へ赴いた。大學豫科時代、彼も田舎の女學生などの日本人女性と付き合つたが、その戀が實ることとはなかつた。がっかりした彼は自分の戀愛を記録した材料を「黛玉が詩稿を燃やしたように火中に投じた」のち、舊式の結婚を選択したのだった。彼が留學中に書いた作品「沖積期化石」^②（一九三二）、「一班冗員的生活」^③（一九三二）、「她懷望着祖國的天野」^④（一九三二）は自身身の挫折經驗を反映したものか、留學生の戀愛はどれも失敗に終わっている。興味深いことに、この三作は日本人女性との關係に壓力を感じたり、心が揺らいだりする留學生の身振りをあぶり出している。滑稽ともいえるこうした描寫は他の創造社同人が描いたロマンチックな戀愛像と著しく異なるものだ。

張資平の綴つた反ロマンチックな戀愛像は何を意味しているのだろうか。また、留學生の姿をリアルにえぐり出すその手法はどこからきたものだろうか。これらの疑問を考えるにあたり、まずは中國人留學生と日本の下層社會の女性の間の戀愛に焦點を當てて論じてみたい。

具體的には、まず新聞記事などの資料に反映された留學生の戀愛像に迫り、創造社同人の描いた「叶わぬ戀」という虚像との差異を確認

する。そのうち、張資平の「沖積期化石」「一班冗員的生活」「她悵望着祖國的天野」が日本人女性と留學生を「一途な女／搖らぐ男」というリアルな構圖で描いたことの意味を検討する。次に、平江不肖生の通俗小説『留東外史』との比較分析を通じ、張資平の戀愛小説を『留東外史』のバリエーションとして位置付けてみたい。最後に、張資平の「寫實的手腕」の獨自性を明らかにする。

1 近代留日學生と戀愛

清末民初、大量の中國人留學生が日本に赴いたのはちょうど北村透谷「戀愛は人世の祕鑰なり」、厨川白村「ラブイズベスト」といった戀愛言説が世論を席巻していた時代だった。また、『魔風戀風』(一九〇三)『蒲團』(一九〇七)といった明治文學には、ハイカラで自由闊達な女學生が理想の戀愛對象として登場していた。張資平が「つばめのような女學生に向かつて戀愛を追求したい」と書いていたように、日本で近代的な空氣を呼吸した中國人留學生も女學生との甘美な戀に憧れていた。

しかし實際には、當時の日本社會における中國人差別の現實は厳しく、留學生が女學生と交際することはほぼ無理なことだった。女學生に代わって、彼らの作品の隨所に登場する身近な戀愛對象となつたのが下層社會の女性たちである。例えば、李叔同は彼の繪のモデルをつとめた日本人女性を戀人にしたと言われている^③。周作人の妻である羽太信子は酌婦や下女を経験したことがあつたし、郁達夫の愛した隆子^④は小賣店の娘だった。當時の中國の新聞も、留學生の交際相手は日本の下層社會の女性だと認識していた。留學生が正式に日本人女性と結婚する割合は百分の一未満であり、その多くが「料理店の酌婦、病院

の看護婦、旅館の下女」などの下層社會の女性であると指摘した新聞記事「清日連姻不易」はその一例である。

ただ、これらの女性と留學生の戀愛は、對等な立場の上に築かれたものではなかった。當時、「女性性」を賣り物にして留學生に侍した女給たちは娼婦ではなかったが、容色を元手にし、男性にサービスすることによつて収入を得ていたことに變わりはない^⑤。また、「娶外國妻^⑥」という新聞記事は、中流以下の出身の日本人女性^⑦は、中國人留學生が歸國すればみな昇進して富裕になると期待して留學生と結婚したがっているのだと解説している。このような經濟的打算や女性の商品化は確かに民族對立を見えにくくし、中國人留學生と日本人女性との戀愛を芽生えやすいものにしたが、そうなる^⑧と留學生は、彼女たちを欺いたり捨てたりできる對象として取り扱うようになった。

讀賣や朝日などの日本の新聞も、一時の慰めのために下層社會の女性を妾として圍う留學生の姿を暴いている^⑨。また、「痴情女千里尋愛人賦雙飛發覺君有婦」や「日女來華尋戀人^⑩」といった中國の記事は、それぞれ留學生が未婚と偽つて日本人女性と結婚したこと、歸國の際に日本人女性を見捨てたことを報じている。留學生だつた黃尊三も『三十年日記』で友人の張少留が歸國前に日本の妻子を捨てた出來事を記述している^⑪。これらの記述から、留學生はハイカラな自由戀愛を享受していたが、舊式婚姻の妻以外の女性を「玩弄物」とする傳統的思想から抜け出していなかったらしいことが窺えてくる。

また、留學生の戀愛認識が前近代と近代の間で搖れ動いた外因として、政府や留學生内部の抑壓も無視できない。清朝と民國の政府は雙方とも「怠荒を戒め、勉學に勵ませる」ために留學生の「不名譽な」國際結婚を禁止した^⑫。さらに、日中關係が悪化すると、留學生の内部

にも民族主義の視線に基づいた抑壓的な視線が生まれた。一九一一年、日本人の妻を持つ駐日公使の吳振麟は留學生たちに直訴されて解任を求められた¹⁸。一九一七年、やはり日本人女性と結婚した留學生の曾天宇は漢奸として中傷され、留日學生監督所に告發されている¹⁹。

こういう傳統的性道徳や民族主義の厳しい視線にさらされた戀愛は、最初から立身出世の志向と背反するものであり、公的な場で正當性を認められることは望めなかった。このため、留學生と日本人女性の戀愛が結婚の段階へ移行することは非常に難しく、肉體的満足と流行の追隨に過ぎない戯れの戀に終わることが多かったようだ。

ただし、現實には周作人のように日本人女性との戀を實らせた例もあった。以上のような新聞記事に登場した日本人女性を弄ぶ留學生のイメージは、おそらくある程度現實を反映していたであろうが、メディアによつて誇張された可能性もある。民族差別的な視線を帯びた日本の新聞が中國留學生を醜惡に描きがちだったことは言うまでもない。觀念の變革が始まったばかりで社會全體が保守的な傾向を持つ二十世紀初頭の中國においても、留學生の國際戀愛が傳統的な規範に逆らつて女色に耽る放蕩な行爲であるとして非難される傾向にあった。

當時の社會新聞やゴシップ、大衆小説から素材をとつた通俗小説家である向愷然（筆名は平江不肖生）も留學生の男女交際に否定的な眼差しを投じ、代表作である『留東外史』²¹（以下『外史』と略稱）で賭博や女遊びに溺れる留學生の惡行を誇張した筆致で暴露した。この作品は多數の讀者を獲得したと同時に、多くの中國人の留日學生に對する印象をさらに悪化させた。例えば、夏衍が日本へ留學する際、『外史』の内容を聞き及んだ母は彼に「日本の風俗は非常に悪い」と言い、男女關係に注意するようと傳えている²²。

舊制高校・帝大でエリート教育を受け、戀愛は高潔、神聖であるという理念を受け入れた創造社同人は、基本的に『外史』とはつきり境界線を引こうとした。郁達夫は「沈淪」が不道徳的だと非難されたときに、周作人の辯護を求め、自分の作品が『外史』と同じ穴の貉になる運命を逆轉させた²³。ダンテやゲーテこそが典範だと考えた郭沫若は『外史』はただ下品で取るに足りない「淫書」と貶した。しかし、張資平は逆に「その寫實的手腕は悪くないな」と賞賛し、さらに郭沫若に、郭と日本人妻との戀愛經驗を語らせて、「留東外史續」として書きたい、などという冗談を言つたという。

『外史』に對する態度の相違は張資平と他の創造社同人の戀愛の取り上げ方の違いを鮮明に表しているのではないだろうか。このような問題意識を抱きながら、まずは創造社同人の戀愛小説を見てみよう。

2 創造社同人の「叶わぬ戀愛」

留日學生の文學創作を代表する創造社同人の小説は作家の自意識を中心的な主題として日中の國際戀愛を描き、しばしば「叶わぬ悲戀」として脚色した。ここでは、郁達夫「沈淪」（一九二二）と郭沫若の「落葉」（一九二五）を例にとり、日本人との戀愛に踏み込めない留學生と、彼らが憧れる日本人女性のイメージを分析してみよう。

「沈淪」で、中國人留學生の主人公はN市の下宿屋の二階に暮らしていた。「彼」は下働きしていた家主の娘を好きになつたが、胸中の民族コンプレックスのために始終戀心を告白できないでいる。ある日、彼は階段を降りて風呂に入っている彼女の裸體を覗き見た。

そつと便所の戸を開けると、彼は便所の窓邊に立ちつくしたま

ま外をのぞいた。便所は下宿の風呂場と隣り合わせである。だから、便所のガラス窓からのぞくと、風呂場の中はまる見えであった。はじめはちよつと見てすぐひきかえすつもりでいたのだが、一目見るや釘付けにされたように動けなくなった。

雪のように白い二つの乳房
ふくやかな白い太もも
全身の曲線⁽²⁵⁾

官能的な裸體を竊視した後、部屋に戻った主人公は湧き上がる欲情に亂れ狂う。ほかに「彼」は日本の女學生の「秋波」や「嬌聲」に心を躍らせたり旅館の仲居の姿態に心を奪われたりしているのだが、最終的に日本人女性によって引き起こされた欲望は全て民族的屈辱や自己嫌惡の念に轉じ、「彼」に自殺願望を起こさせることになった。李歐梵は、このような描寫は郁達夫自身の心にある性、人種差別、愛國主義の葛藤の反映に他ならないと指摘している⁽²⁶⁾。しかしこの場面で注意したいのは、下宿屋の娘は主體的な言動を持つことなく、ただ留學生の欲情、あるいは屈辱を掻き立てるだけの、「白い二つの乳房」と「白い太もも」に代表されるエキゾチックな肉體的記號として描かれているということだ。

「沈淪」の四年後に發表された郭沫若の「落葉」は留學生、洪師武の悲戀を取り上げている。彼は友人の看病に來たのをきつかけとして、看護婦として働く菊子を愛するようになった。しかし、洪師武は自分が梅毒を患ったと誤解し、純愛を得る資格がないと思い込んで菊子との愛を斷ち切ってしまう。留學生の葛藤に満ちた内面を表現した「沈淪」とは異なり、「落葉」は菊子が書いた四十一通のラブレターを全

文引用するという形で彼女の情熱的なイメージを浮かび上がらせている。

夢のような、海岸に身を潜めた短い日々を今思い起すと、私たちはいかに恐ろしい罪を犯したことでしょう！ お許しを願います。幸福な日々も、恐ろしい罪の痕跡しか残っておりません。私はどうやって謝罪すればいいのでしょうか。ああ、私の愛するお兄様！ 私は本當の惡魔なのです！ 本當に恐ろしい惡魔です！ 恐ろしい惡魔！ あなたを恐ろしい地獄に導いてしまいました。私は恐ろしい女なのです！ でも、過去のことを言っても仕方がありません。これからは必死になります、私たちは互いに支え合い、慰め合いましよう、喜びも悲しみも、すべてを私に分け與えて下さい。私たちは一心同體となつて、共にこの短くて淡い、そして苦い闘争を終わらせましよう⁽²⁷⁾。

戀人と身體的接觸を持った自分を過度に責める菊子は、聖母マリアに重ねて造形された神聖なプラトニックラブのシンボルといえよう。戀人と支え合い慰め合う、一心同體の關係を希求する菊子の手紙は彼女の熱烈な愛に基づくものに違いない。しかし、第三十五通、三十六通の手紙では、彼女は洪師武を「わが最も愛する主」とまで崇めており、對等な戀愛關係というには戀人への崇拜の念があまりに誇張されている。

こうした清らかな女性像と精神愛を贊美する描寫はダンテの『神曲』を彷彿とさせるし、「叶わぬ悲戀」という結末と一人稱書簡體の挿入からは『若きウェルテルの悩み』の影が感じられる。郭沫若がヨ

ヨーロッパ文學の戀愛表現を借りて「落葉」にロマンチックな色合いを與えようと試みたことは明らかだ。なお、同年に發表された郭沫若の自傳的小説「漂流三部曲 歧路篇」では、作者をモデルとする主人公がダンテのように文學によつて妻に永遠の生を授け、愛の崇高な力を稱揚するために「潔光」（即ち「落葉」）という小説を書くことを決心している。この二つの手がかりを踏まえると、「落葉」に描かれた洪師武と菊子の叶わぬ悲戀は、リアルな戀愛體驗というより、むしろ作者自らの浪漫主義的な理想と情熱を託したものだと言える。

郭沫若の綴る神聖な愛と郁達夫の書いた赤裸々な欲望は全く異なるものだが、叶わぬ戀愛像を通じて、戀愛そのものよりも自らの感情を表現しようとしているところは一致している。そして、このような意圖で綴られた「叶わぬ戀愛像」において、ヒロインの日本人女性性は蠱惑的か慎み深いかに拘らず、作者の感情を際立たせる抽象的な記號にすぎなくなつてしまひ、もはや個性を持つ主體的な存在であることをやめてしまつてゐる。こうして、前節で述べた日中國際戀愛の複雑な現實も見えにくくなつてしまつたのである。

一方で、「創作するにも、やはりまず觀察しなければならないじゃないか」と主張した張資平は、創造社同人に共通していたロマン的な傾向や「自己表現」に熱中することなく、留學生と日本下層社會の女性性の戀愛の破綻を克明に描き出している。次に張が創作した三つのテクスト、「沖積期化石」「一班冗員的生活」「她悵望着祖國的田野」を讀んでみよう。

3 噛み合わない愛情

——「一途な女」と「揺るぐ男」

一九二二年に發表された「沖積期化石」「一班冗員的生活」「她悵望着祖國的田野」はいずれも戀愛を中心テーマとするものではないが、中國人男子留學生と下層階級の日本人女性との戀模様を丹念に表現している。

三作のうち最も早く發表されたのは長編小説「沖積期化石」であり、その五二章（五五章には、留學生の鶴鳴と日本人女性、如嫣の愛の芽生えから破綻までの顛末が描かれている。當初、奔放な女給如嫣は、煙草の吸い方を鶴鳴に笑いながら教えたり、こつてり化粧した顔を鶴鳴の口元に寄せて媚びを賣つたりしていた。ところが二人の關係が進むにつれ、彼女の感情は「女給」的な打算から純な戀心へと發展していく。彼女が姉のような態度で「ここでは、私の心を占領できるだけで、私の體を占領することはできないわ、ばか女子！」と要求したので、鶴鳴は彼女の「命令に従つて」郊外で同棲するための部屋を探した。

その後、鶴鳴から「愛している」という眞剣な告白を引き出した如嫣は笑顔を引つ込めて彼にキスをしてから涙をこぼすのだった。この官能と感傷を織り交ぜたキスのシーンでは、如嫣は男性から値踏みされる客體ではなく、性と愛の結び付きを追求する能動的存在となつてゐる。

しかし結局のところ、彼女と鶴鳴の戀愛認識はすれ違ふことになつた。元々、女性性を元手に生活の糧を得ていた如嫣にとつて、男性の氣を引こうとする行爲は娼婦のそれとあまり變わらない性質のものでつた。しかし鶴鳴は如嫣のその態度を「文明先進國」特有の開放性だと受け取つたのである。保守的な中國の女性にはない大らかな物腰に深く惹きつけられた鶴鳴はさらに神聖な宗教儀式を連想している。

如媽は教會の僧正のように鶴鳴に按手式を行った。彼の兩手は如媽にしっかりと握られている。彼は如媽の笑顔を見ながら、教會から學んだ讚美歌を心の中で歌った。(中略)

如媽もまるで彼に「神の恵みを願ひ、神があなたを守つて、あなたを常に私のものにしてくださいますよう：アーメン」と言っているようだ。如媽が行つた洗禮によつて、鶴鳴の哀愁、憂鬱、悲しみのすべては洗い流された。この(如媽が働く)レストランは彼のチャペルだ。その夜から彼は毎晩チャペルに行つて如媽を賛美した。⁽³³⁾

鶴鳴のイメージの中で、現實の愛の經驗は彼を救済する宗教的な儀式に變化し、女給の如媽も聖女のような高貴な姿に變身したのだ。城山拓也が指摘した通り、一九二〇年前後の中國では、キリスト教は極めて近代的な文化を體現するものとして中國の知識人、學生に受け入れられている。張資平も宗教に關する描寫を通じて近代を描いた。⁽³⁴⁾ 鶴鳴の抱く戀愛イメージは宗教的色彩が濃い、それは彼が戀愛神聖という近代價值觀を受け入れたことを表している。また、鶴鳴が如媽との同棲は純粹な愛に基づくものであり、性的な満足のためではないと固く信じているところから、彼の具體的な希求が、高い精神的價值を持つとされたプラトニックラブにあつたことが讀み取れる。

鶴鳴は欲情の覺醒を感じたものの、如媽とのキスを中斷した同級生の崔君を「地獄へ入ろうとした」自分を救つてくれた「天使」と考えた。愛欲の自覺が鶴鳴にもたらしたのは高揚感ではなく、動搖と恐慌だったのである。父から品行を正すよう諭した書簡を受け取つた彼は、

その一言一言が自分の弱點を痛切に批判しているようにと思い、理性と性欲の葛藤に陥つた。理性は彼に「無分別な少女のために、輝かしい未來を犠牲にするのか……ただの娘のために將來の最高の名譽を捨てることに耐えられるのか」と詰問した。⁽³⁵⁾

こうして、人間的な赤裸々な性欲を鶴鳴に自覺させた如媽はもはや「禮拜」に値する聖女から「無分別な少女」「ただの娘」となり、二人の關係も神聖な愛から彼の未來を妨害する「不名譽なこと」に變貌してしまつた。彼の心情の劇的な變化から、鶴鳴が日本人女性との戀愛に求めたのは、自分の近代的幻想の一方的な投影に過ぎなかつたことがわかる。

次に「一班冗員的生活」を検討してみよう。この小説では、留學生と日本人女性の戀愛が破綻するきっかけは性欲ではなく、經濟的危機である。仕立屋の娘、綾英と留學生の程君は戀愛して同棲を始めるが、程君の官費獎學金を取り消されたために二人はスラム街の三疊しかない家に暮らすことになり、月に六角の電氣代さえ拂えなくなつた。そうした厳しい同居生活の中でも、彼女はたばこ工場で遅くまで働き、わずかに四、五角の給料で粘り強く家庭を支えようとする。家計だけではなく、程君の大學入試のために計畫を立てて貯金しようとする彼女はあたかも母親のようである。

綾英にとつて、家庭の營みと愛とは緊密に絡み合うものだ。貧乏のどん底でも彼女は後悔したり恨んだりせず、程君を愛する氣持ちは「變わらないばかりか、一層情熱的になつていった」。しかし、「貧しい家庭の生活をこれまで経験したことになかつた」程君は一日中「鬼火のような洋燈を見つめながら涙を流」したり、キスを要求したりと、ふがいない軟弱な様子を見せている。仕事にいく綾英に不満を

感じた程君は彼女が「自分によそよそしくなった」と感じ、貧乏な生活の中で彼女に對して自分の「怒りの火」(怒焰)と「飢えの炎」(餓焰)をぶつけるようになる。程君は綾英の妊娠を知るとついに「彼女を捨てる決心がより強くなり」、嘘をついて逃げてしまう。

程君の動搖を見る限り、妊娠は破局を早めただけで、二人の間の根本的な矛盾は早くから生まれていたと言えるだろう。本作は經濟的苦境における日本人女性の芯の強さを描くと同時に、軟弱で無責任な留學生のイメージを剥き出しにしている。張の筆致は國際戀愛における雙方の噛み合わない様相を可視化しており、斬新で興味深い。

三番目の小説「她悵望着祖國的天野」も留學生と日本人女性の行き違う愛を描いたものである。日中混血の秋兒は工場の監督に強姦されて娼婦に身を落としたが、留學生Hのラブレターと「永遠の守護者になる」という言葉に心を動かされて彼と愛し合うようになる。彼女のHに對する愛は「日に日に燃え上がっていった」(二天一天熱烈起來)。秋兒の情熱的な戀心は「ひらがなで書かれていたが、字が拙く、非常に読みづらい」手紙を引用する形で示されていく。

あのひとたち——かあさんやとうさん、むらのひとたち——がなにをいつても、わたしはだいじようぶ、こわくありません。これからはあなたにしたがい、あなただけをあいします。おもちゃになつてもいい、どれいでもいい、わたしをすきにみなしてかまいません。でも、ほかのおんなをすきになつてわたしをすてるのはだめです。もしわたしがいらなくなつたらわたしをころしてください。あなたがべつのこいびとのうでのなかでねむるのをみたくないから。わたしはへびのようにしつこいとしてってください。あ

いすることはできませんが、おなじようににくむこともできません！
(傍線は筆者による)

家族や同郷と決裂しようとも、自分のすべてを戀愛に投じようとする秋兒は、『人形の家』のノラを彷彿とさせ、このヒロインについては茅盾も稱賛している。しかし、このラブレターは因襲からの純粹な解放というには過激すぎるように思われる。Hが恐怖を感じた自殺の暗示や蛇の比喩といった、言わば「いきすぎた愛情表現」にはもつと注意する必要があるだろう。

Hはかつて彼女に「彼女の過去のあらゆる恥辱を洗い流し」「彼女のこれからの哀しみを慰める」⁽³⁵⁾と愛を告白した。表面的にはこれらの甘い言葉は上述の北村透谷「戀愛は人世の祕鑰なり」に似ており、愛の崇高な力を肯定するように見える。秋兒もHの告白を聞き、自分の運命を變える唯一の希望を彼に寄せたからこそ、このように思いつめた手紙を書いたのだろう。しかし、一時的に性的満足求めただけのHは秋兒からの淺薄で粗末な(と彼は思った)手紙を讀むと、まず笑い、次に悲しみを感じ、最後に恐怖を感じてしまった。輕薄な氣持ちから女性に近づいたにもかかわらず、Hが恐怖を感じるようになるという變化を通じて、流行としての戀愛を樂しもうとした留學生が愛の重さから逃げようとする實態が描き出されているのである。

また、まっすぐな愛を抱いたために拒否されたというのは秋兒だけではなく、張資平小説に登場する日本人女性に共通する悲運であるようだ。「沖積期化石」では、戀人と肉體的にも結びつきたいと考えた如媽が鶴鳴に「無分別な少女」と斷罪された。「一班冗員の生活」の綾英が濃密な愛情と心血を注いで支えようとした家庭生活は、程君に

とつては逃げだすべき牢獄でしかなかった。戀愛を一過性の享樂とみなす留學生にとつて、安定した家庭や永遠の誓いを眞摯に求める日本人女性には、戀人に盡くすことを厭わないかわりに重たい戀愛感情を押し付ける「一途な女」と言えるだろう。

このような造形によつて、近代日本社會に生きた女性のリアルな姿が映し出されているのは興味深い。例えば、「她悵望着祖國的天野」の中では秋兒が繰り返し「I love you only, my heart is true」という英語の歌を歌っている。これは一九〇八年にウィーンで初演されたオペラ *The Chocolate Soldier* の *My Hero* という挿入歌である。テクストには別れた戀人への想いを表現した齊唱 (chorus) の部分しか引用されていないが、その前の導入部分 (canto) は以下のようなうだ。

I have a true and noble lover,
(中略)

And for our happiness I pray,
Our lives belong to one another.
Oh happy, happy wedding day.

眞實の戀人を得たヒロインが幸せな結婚の日を夢見するという歌詞は、秋兒の願望を如實に代辯していると言える。また、秋兒が讀んでいる女性雑誌『婦女世界』は、おそらく一九〇六年に創刊された『婦人世界』^⑩を念頭に置いていると考えられる。家庭を營むための「新しい趣味と智識」を傳えて女學生や職業婦人、ひいては女工にも人氣を博したというこの雑誌は、秋兒に結婚生活についての青寫眞を與えたかもしれない。ロマンティックラブ・イデオロギーが中産階級を中心に

廣がり、良妻賢母教育が幅廣く日本社會に影響を及ぼす背景のもとで、張資平は重い愛情をおしつけようとする「一途な女」を描いた。これらは、大衆文化から戀愛や家庭についての理想を吸収していく日本人女性の様子を中國人留學生の視線で寫し取った貴重なテクストと言えるだろう。

しかし、近代的な婚姻や家庭の理想を熱望する日本人女性と實際するうちに中國人留學生はしばしば束縛や葛藤を感じて揺らぎはじめたのだった。本來前近代の中國では、親の決めた結婚以外に蓄妾や賣買春が許容されていたので、男性は優位に立ち、一對多の形で擬似戀愛的な體驗を愉しむことができたのだった。そうした前近代的な性道德に慣れ親しんだ留學生が、自分の戀愛理想に能動的に取り組もうとする日本人女性と出會った時、最初は確かに女性の「近代的風姿」に惹かれたとしても、次第に愛への責任に重い束縛、ひいては恐怖を感じざるを得なかった。こうした意味で、張資平小説が描く「一途な女」と「揺らぐ男」のパターンは、國際戀愛が破綻に至る根本的な原因——價值觀の齟齬——を反映しているだけでなく、男女關係が前近代的な「情」から近代的「愛」へシフトした際に、中國人男性が抱いた違和感と抵抗をありありと提示したと考えられる。

4 放蕩留學生の變種と「寫實的手腕」

このように前近代思想から完全に抜け出しきれていない留學生の問題を明らかにした張資平小説は、優れてリアリズム的だと言える。このようにロマンチックではない戀愛の内實の描寫は「自己表現」を重視する創造社文學より、むしろ放蕩留學生の姿を浮き彫りにした通俗小説『留東外史』のバリエーションと見なしうるのではないだろうか。

前述した通り、留學生が「吹要警拉強」（だばら、脅迫、警察との結託、ポン引き、暴力）といった手口を使つて日本の下層女性を輕率にもてあそんで捨てる惡行を赤裸々に暴露した向愼然に對し、新文學者たちは大抵否定的な評價を與えた。だからこそ、『外史』は世に出た直後は舊文學・鴛鴦蝴蝶派の範疇に入れられたのである。この新舊の二分法は文學史の主流を形作っているが、董炳月は『外史』は「寫實性」と國民性の批判などの側面で「新文學の要素」を含んでいると論じている^④。また、中村みどりも『外史』の放蕩女學生像には日本の新聞に描かれた女學生のゴシップや、大衆小説に出てくる女性キャラクターの影があり、時勢を捉えた一面もあると指摘している^⑤。

張資平はロマン主義を旗印とした初期創造社の一員としてデビューしたが、彼は社團内部では通俗的な作品を書く寫實派とみなされていた^⑥。彼の小説は、當時の新聞によく現れた留學生が下層の日本女性を見捨てるパターンを取り上げ、彼女たちから流行的體驗あるいは肉欲の慰めを求める留學生の姿を描いた。また、彼は大正社會で流行していた女性誌や英語の歌などの間テクストを通じて、戀する日本人女性の姿を浮き彫りにしている。多様な社會情報を吸収して留學生の戀愛の「眞實」にアプローチしようとする張資平の小説には『外史』との共通点が多い。張が『外史』を高く評價した原因もそこにあるのだから^⑦。

しかし、『外史』序文に論されている通り、向愼然の目的はたとえ自らの道徳を犠牲にしても「惡黨と宣戰」することにあつた^⑧。留學生の惡行を描いたのは、彼らの「淫亂」を批判するためである。このような價值判斷は、第一節で紹介した中國の新聞記事や政府の章程と根本的な類似性があり、戀愛を下品な肉欲と一括りにする傳統的な考え

方を表している。また、『外史』には日本人女性を淫亂な賣春婦として歪曲し、國民的な鬱屈を晴らそうとする思惑もあつた^⑨。「一途な女性」と「搖れる男性」を炙り出した張資平の「寫實的手腕」は、こうした傳統のかつ民族主義的な視線とは一線を畫するものだ。

何よりも、張資平は作家自身の先入觀あるいは感情を控え、人物の行動と心理を客觀的に描こうとした。地質學を専攻していた彼は留學生の戀愛を科學的な用語で表現することが多い。「她悵望着祖國的天野」では、一時的な性的満足求めたHが目標を達成した後、「秋兒を愛する熱情はすでに放物線（curve）の頂點を過ぎて段々と下がつていく」と描いた。科學者が研究對象を觀察するような客觀的な敘述からは、揶揄や非難のニュアンスが感じられない。また、こういった敘述の態度は民族的感情から自由であり、留學生と日本人女性の關係を中立的に描寫することも可能にした。「一班冗員的生活」で程君と綾英が互いが疑い、二人の間には「まるで霧がかかったようで、互いをはつきり見えなくなつた」というのもその一例として挙げられる。張資平はあくまで傍觀者として戀愛雙方の隔たりや疎遠を見詰めたのだつた。

作家自身の價值判斷の代わりに、張資平は人物の内心に深く入り込んでその葛藤や矛盾を「解剖」する傾向を持つている。動搖した留學生の心象風景のみならず、彼らの考えの矛盾も冷靜に描かれた。例えば、「ヨルダン川の水」で父を失い、悲嘆に暮れた留學生の章郎は、自分を慰めて愛してくれた下宿屋の娘を「天使」として贊美したものの、性的關係を結んだ後は彼女を思想のない淺薄な女性として蔑視するようになる^⑩。章郎の認識の激變は「沖積期化石」の鶴鳴の心中における戀人が「聖女」から「ただの娘」へと變貌した事と重なり合うも

ので、共に留學生の戀愛實踐に隠されていた性差の問題を反映している。

また、誰も氣にかけない日常的な斷片や滑稽さに目を留めるのも張資平の「寫實的手腕」の重要な特徴である。これは「沖積期化石」に描かれた家書をめぐる小さな斷片からはつきり窺える。父からの手紙に返信した時、鶴鳴は冒頭に「父親大人」と丁寧に書いた。それを見た如媽は、もう成人している彼がなぜ父を「大人」とするのか分からず、鶴鳴を「ばかな子」として嘲笑した。この滑稽なディテールは如媽が中國語と日本語の「大人」の意味を混同して生まれた誤解である。だが、父に戀愛の狀況など報告する必要はないのに、彼の父はなぜ息子の戀愛に干渉するのかといった如媽の戸惑いと結びつけると、この「大人」についての描寫は日中の戀愛概念の「溫度差」に繋がり、まだ親に従う習慣から抜け切れていない中國人留學生の未熟さを日本人女性の目を通じて引き出すことに成功している。

留學生の心理と日常的な瑣事を細かく綴ったのは周りの留學生に取材した結果だけではない。「私的創作經過」によれば、張資平は自分の戀愛體驗も「直觀的に延長」して利用していた⁽⁸⁾。このエッセイで、彼は自分が日本人女性に求愛した經過や感想を小説の素材として記録し、日本人女性から受け取ったラブレターを創作のインスピレーションに活かしたと同想している。また、教會に行つて敬虔に祈りもしたが、ほぼ毎晩カフェで女給とふざけ合つていたという自らの矛盾も創作の材料となつた。張資平の回想から、彼は自分自身も觀察の「サンプル」の一つとして捉えており、自らの戀愛體驗を巧みに作品に取り入れていたことが分かる。

自分も含めて留學生の戀愛實踐を客觀的に觀察し、精密に「解剖」

した結果、張資平の戀愛小説はドラマチックな展開や精密な構成ではなく、むしろ平凡で滑稽な日常の斷片を主要な要素としている。彼が描いた留學生は惡行を働いて道德的な不安を全く感じない『外史』の放蕩留學生とは異なり、戀人との距離や自らの矛盾といった問題を抱いた生身の存在である。

これらの描寫を通じて、張資平の「觀察」は誇張された抽象的な符號や經驗的な先入觀を放棄し、具體的で複雑な、本來の生活の姿を再現しようとする試みと言える。それは絶對的なものの代わりに相對的な現實を掴むことであつた。こうした寫實的手腕こそ、張資平の戀愛描寫がメディアに現れたネガティブな留學生像あるいは『外史』における「間夫／賣春婦」の造形といった公式的な「型」から抜け出し、日本と中國、前近代と近代の狹間にある國際戀愛の複雑な現實を炙り出すことができた理由だろう。

終わりに

日本という自由戀愛のユートピアにおいて、封建制度の束縛から解放された中國人留學生は近代的な精神に憧れ、日本人女性とともに自由戀愛を體驗し始めた。しかし、前近代思想の殘滓や國家政策の抑壓により、彼らの戀愛は婚姻や責任から遊離し、流行的享樂に留まることが多かった。このような狀況を如實に描き出した張資平小説は中國人が戀愛と出會つた際の問題を掘り上げたのである。

彼の一九二〇年代初めの三作では、芯の強い日本人女性に對して、靈肉衝突や經濟的危機といった悩みを抱く留學生の姿が浮き彫りにされた。また、彼らが自分の苦痛を日本人女性の重たい愛のせいにして葛藤するパターンも描かれた。このような「一途な女／揺らぐ男」の

構圖は根本的な價值觀の齟齬を表しただけでなく、前近代的な「情」から近代的な「戀愛」へと轉換していく過程において中國人男性が感じた動搖と抵抗感を明らかにしたと考えられる。

創造社同人の「叶わぬ戀愛」に比べると、留學生戀愛の影の面を浮き彫りにした張資平の創作は、むしろ放蕩留學生像を綴った『留東外史』に近いと思われる。ただ、張は『外史』の「女を弄ぶ留學生／淫亂な日本人女性」という「型」を鵜呑みにしたわけではなく、自らの感情や價值判斷の代わりに、留學生の戀愛實態を觀察し、人物の葛藤や矛盾を冷靜に「解剖」して戀愛生活の細部を丹念に綴っている。このような寫實的手腕によつて、張資平の作品はステレオタイプな留學生戀愛像と距離から置き、生々しい戀愛の現場に迫っているのだ。

戀愛をめぐる中國人の近代體驗にある問題を掘り起こし、等身大の日本人女性の姿を浮き彫りにしようとしたところに、張資平小説の新機軸が認められる。このような創作實踐は、自己發見と個人の解放を目指した五四時代の神聖で理念的な戀愛言説からは大いに乖離していたが、だからこそ近代中國人が戀愛と出會つた際の現實的な風景の發見が可能になったのではないだろうか。

歸國後も寫實の態度を抱き續けた張資平はさらに近代中國の自由戀愛、性解放の潮流を背景にした若い男女の姿を炙りだす小説を書いた。李長之は彼が近代中國青年の婚姻問題を掘んだと論じているし、近年の研究も張資平小説が自由戀愛の理想が現實に向き合つた際に生じる問題に直面したと指摘している。⁵⁰ 張資平の創作全體から見ると、留學生の戀愛問題を取り上げた日本での創作は彼が「寫實的手腕」を獲得した原點であり、五四時代の個人解放や戀愛神聖を相對化した起點でもあつたと言えるだろう。

注

- (1) 楊聯芬「戀愛」之發生與現代文學觀念變遷」（『中國社會科學』第一期、二〇一四年、一六〇頁）を參照。
- (2) 張資平の戀愛經驗については「我的創作經過」（『資平自述——張資平自傳』、江蘇文藝出版社、二四三—二四六頁）に詳しい。
- (3) 「像黛玉焚稿般地、付了火」、前掲『資平自述』、二四六頁。
- (4) 張資平「沖積期化石」、泰東書局、一九二二年初版。本論で使ったテキストは張資平「沖積期化石」（上海書店、一九八六年）。以下、本論の翻譯は、特に注を附さない限り本論執筆者による。
- (5) 張資平「一班冗員的生活」、「創造」（季刊）第一卷第三期、一九二二年。本論で使ったテキストは張資平「愛之焦點」（上海書店、一九八九年）一—三八頁。
- (6) 張資平「她懷望着祖國的天野」（彼女が祖國的天野に焦がれる）、『創造』（季刊）第一卷第一期、一九二二年。本論で使ったテキストは張資平「愛之焦點」（上海書店、一九八九年）一—三三頁。
- (7) 北村透谷「厭世詩家と女性」『女學雜誌』、三〇三號、三〇五號、一八九二年。厨川白村「近代の戀愛觀」、一九二二年、改造社。
- (8) 「想向那些小燕兒般的女學生追求戀愛」。前掲『資平自述』、一九五頁。
- (9) 吳可爲「古道長亭——李叔同傳」（杭州出版社、二〇〇四年、九二頁）を參照。
- (10) 稻葉昭二「郁達夫——その青春と詩」（東方書店、一九八二年、一六九頁）、張菊香・張鐵榮『周作人年譜』（天津人民出版社、二〇〇〇年、八十頁）を參照。
- (11) 「清日連姻不易」、『京都日報』、第八百二十三號、第五頁。
- (12) 豊田かおり「モダンイズム文學に見るモダンガール」（『文化學院大學紀

要』、二〇一四年、一〇九頁）を参照。

(13) 『娶外國妻』、『時事新報』、一九二二年、七月十三日、三頁第一版。

(14) 『清國留學生と風紀取締』、『讀賣新聞』一九〇六年、四月九日、六頁。
『夏木立』、『朝日新聞』一九〇五年、七月十三日、六頁。

(15) 『日女來華尋戀人』、『時事新報』、一九二二年、二月二日、三頁第一版。
『痴情女千里尋愛人 賦雙飛發覺君有婦』、『盛京時報』、一九三六年、十月二日、十三頁。

(16) 『黃尊三日記』(上) (鳳凰出版社、二〇〇九年、二八七頁、三二二頁、三八九頁)を参照。

(17) 一九一〇年、清朝政府は學部で留學生に外國の女性との婚約および結婚を禁止し、「以戒怠荒而勵進修」旨を發表した。『大清法規大全』續編、第十七卷、『中國近代教育史資料匯編』、七七頁を参照。民國の教育部は「名譽にかなわない行動」が見られた場合、公費留學生に對して隨時勸告し、場合によっては公費を停止することさえできた。『管理留日學生事務規程』一九一四年、十二月二十四日、第十八條。

(18) 『留學生攻揭吳振麟納日婦』、『申報』、一九一一年四月三日、第一頁、第六版。
『留學生一篇大文章』、『神州日報』、一九一一年、四月十三日、第二頁。

(19) 『各省長留學生禁與外國人結婚文』、『教育公報』、一九一八年、第五期、十五〜十六頁。

(20) 『放蕩留學生と日本女性——『留東外史』及び『留東外史補』、『留東新史』について』(『野草』七七號、二〇〇六年、十八〜三五頁)を参照。

(21) 『留東外史』の第一集は一九一六年、第五集は一九一八年に民權出版部から刊行された。

(22) 夏衍『懶尋舊夢錄』、中華書局、二〇一六年、三八頁。

(23) 郁達夫のために辯護してくれた周作人は、『留東外史』はただ語り物

であるが、『沈淪』は一つの藝術作品である」と論じている。周作人『沈淪』『晨報副刊』一九二二年、三月二六日、一頁。

(24) 郭沫若是張資平が『留東外史』を讀んでいるのを見かけた場面、及び同書をめぐる二人の會話を詳しく記述している。(郭沫若『創造十年』、『郭沫若全集』第十二卷、人民文學出版社、一九九二年、四二頁)を参照。また、張資平も郭沫若の戀愛經驗を小説の素材として聞いたことを『創造季刊時代』で言及している。巫小黎整理『回憶創造社二題』(『新文學史料』第三期、二〇二二年)一八〜二七頁を参照。

(25) 『輕輕的開了便所的門、他盡兀兀的站在便所的玻璃窗口偷看。原來他旅館里的浴室、就在便所の間壁、從便所的玻璃窗里看去、浴室里的動靜了了可見。他起初以為看一眼就可以走的、然而到了一看之後、他竟同被釘子釘住的一樣、動也不能動了。那一雙雪樣的乳峰！那一雙肥白的大腿！這全身的曲線！』郁達夫『沈淪』、泰東圖書局、一九二一年初版。本論で使したテクストは『郁達夫全集』(第一卷小説上) (浙江大學出版社、二〇〇七年、三九〜七五頁)。譯文は駒田信二、植田渥雄の翻譯(『郁達夫・曹禹』(現代中國文學六) 河出書房、一九七一年)を参照。

(26) 李歐梵『中國現代作家浪漫的一代』(新星出版社、二〇〇五年、八八頁)を参照。

(27) 『和夢一樣的、在海岸上藏匿着的短短的生涯、現在一追想起來、我們是做了多可怕的罪孽啊！請你恕我罷。快樂的生活也只剩下可怕的罪惡的遺蹤。我當得怎樣地向你謝罪、怎樣的向你謝罪呢！啊啊、我摯戀的哥哥！我自己是真正的惡魔！真正是可怕的惡魔！我把你引到可怕的地獄里了、我這可怕的女人呀！但是已往的事情說也無益。我以後要拼命做去、我們相互爲力、相互爲慰安、無論是樂是憂、你一切都分給我罷。我們互爲一心、互爲一體、共同把這一生之中短促的輕淡的而且是苦烈的戰鬥終結了吧。』郭沫若『落葉』、『東方雜誌』、第二二卷十八期〜二一期、一九

二五年。本論での使用テキストは『郭沫若全集』文學第九編、人民文學出版社、一九八五年、六七～一五九頁。

(28) 「漂流三部曲 歧路篇」、前掲『郭沫若全集』第九編、二四八頁。

(29) 「要創作、不也還是先要觀察嗎?」、前掲郭沫若『創造十年』。

(30) 史雨「張資平『約檀河之水』と外國文學」(『野草』、第一一一號、二〇二三年)を参照。

(31) 同注(4)、二〇一頁、「在這塊地方你祇能占領着我的心,不能夠占領我的身體,傻孩子!」

(32) 同注(4)、二〇〇頁。「如媽像教會的僧正(Bishop)替鶴鳴行按手式。他的雙手給如媽的雙手緊緊的握着。他望着如媽的笑顏默唱從前在教會裏學來的讚美歌(中略)如媽也像是對他說「求天主施天恩,保佑你,叫你永遠屬我……阿們」。鶴鳴的哀傷,憂愁,悲感都跟着如媽替他施的洗禮洗了去。那家菜館是他的禮拜堂。他從那晚起每晚上都到禮拜堂去讚美如媽。」

(33) 城山拓也『中國モダンズムの世界一九二〇、三〇年代上海のリアリティ』(勉誠出版、二〇一四年)七二～七六頁を参照。

(34) 同注(4)、二〇七頁。「你的光輝燦爛之前程,竟爲一個不識好歹底女孩子犧牲麼?(中略)你忍把將來戴最高榮冠之名譽爲一個尋常女兒一擲棄之麼?」

(35) 同注(6)、二八～二九頁。「他們——媽媽和養父和村裏人——說什麼,我都不理,也不怕了。我祇跟你一個人去,我以後祇愛你一個人。你當我做什麼都可以,玩物也好,奴隸也好,祇不要再愛上第二個人,來厭棄我。你不要我的時候,寧可把我殺掉,我總不願生着看你睡在第二個愛人底腕上。你要知道我底性質和蛇一樣的固執。我能夠愛人,也能夠同等程度的恨人!」

(36) 「誰能有勇氣笑秋兒是『不解放』,沒志氣呢?」、茅盾(署名損)、『創

造』給我的印象(『文學旬刊』、一九二三年、三七期、二頁)。

(37) 同注(6)、二〇頁。「洗去她从前一切底耻辱」、「安慰她將來底悲寂」。

(38) *The Chocolate Soldier* はジョージ・バーナード・ショアの『武器と人』(二八九四)から改編された作品であり、一九一三年に日本で上演された。『武器と人』は戦争を背景に、街に逃げてきた兵士と名家の令嬢の出会いとロマンスを描いた風刺的な作品である。*My Hero* という挿入歌はOscar Straus、英語歌詞 Stanislaus Strange に作られた。この歌について「Historic Sheet Music Collection」<https://digitalcommons.conncoll.edu/sheetmusic/1667/> (最終アクセス日二〇二三年一月六日)を参照。

(39) 『婦人世界』については、石田あゆ「大正期婦人雑誌における女性・消費イメージの變遷——『婦人世界』を中心に」(『京都社會學年報』第九期、二〇一一年、五八～五九頁)を参照。

(40) 千田有紀『日本型近代家族——どこから来てどこへ行くのか』(二〇一一年、勁草書房)十一～二七頁を参照。

(41) 『留東外史』の新文學的價值についての指摘は董炳月『國民作家的立場』(三聯書店、二〇〇六年)六〇～六九頁に詳しい。

(42) 前掲『放蕩留學生と日本女性——『留東外史』及び『留東外史補』『留東新史』について』を参照。

(43) 鄭伯奇は「張資平は寫實主義の傾向を最も持ち、彼の初期作品は人道主義の色合いを帯びている」と評價している。(『中國新文學大系』(小說三集)鄭伯奇導言、上海良友圖書公司、一九三五年、十三頁)陶晶孫は彼の作品は「平易で通俗だ」と指摘している。(『牛骨集』太平書局、一九四四年、一四七頁)

(44) 「與惡德黨宣戰」。向愷然『留東外史』、『中國近代小説大系』、百花洲文藝出版社、一九九一年、二頁。

- (45) 前掲『國民作家的立場』二六、三六頁を参照。
- (46) 同注(6)二七頁、「愛秋兒的熱情既過了拋物線底頂點」(Vertex) 漸漸的下降。
- (47) 張資平「約檀河之水」(ヨルダン川の水)、『學藝』第二卷第八期、一九二〇年一月。本論は『愛之焦點』(上海書店、一九八九年)六頁を参照。
- (48) 同注(2)。
- (49) 李長之「張資平戀愛小說的考察——「最後的幸福」之新評價」、『清華週刊』、一九三四年第四一卷第三、四期。
- (50) 例を挙げると、路楊は張資平小説は欲望の中で「愛」の現實性や物質性を發掘し、自由戀愛が現實に直面した際の問題に正面から向き合つたと評價している。「愛欲書寫——一九二〇年代中後期新文壇小説風尚研究」(北京大學中國語言文學系、修士論文、二〇一三年)を参照。また、祝世澤は張資平小説における病の表象は欲望の投影及び欲望に對する懲罰であると分析している。「張資平の戀愛小説と「病」」、『中國文學報』第九四冊、五五、八二頁)を参照。